

つけられ、下着を交換して、血肉を分けたシラミともきれいさっぱり別れたはずが、四十年以上たった今日、ときどき夢に現われて、「ああ、帰れてよかったなあ」と安堵する。遠い昔の夢となった。シベリア抑留生活である。

ウラジオオからイルクーツクへ

熊本県 南部 吉 正

ウラジオの刑務所を出るとき、枕のような黒パンを一本と塩漬けのニシン四匹をもらった。パンの目方は約二キロ、魚の数から推して四日分の食糧だろうと思った。

樺太（サハリン）から来た一行八十人は、六人の看守に追い立てられながら、幌つきのトラックに乗り込み、ウラジオの駅へ向かった。二面の囚人車が引込線の中にポツンととまっていた。中に入ると五つの房に仕切られており、房の中は向き合って三段の棚になっている。

一・五メートル幅の廊下があり、房と廊下の間は鉄格子となっている。その廊下に、銃を持った二人の看守が

突っ立っているのだ。

行く先がどこなのか、皆目わからない。やがて一行が乗り込んだ囚人車は、長い貨物列車の最語尾に連結されて、ウラジオの駅を後にした。

一房六人ずつの個室に八人が押し込められたので、両側の棚に居場所のない二人が、房の中央の板の間に座り込むはめになった。

「行く先はどこだろうか」「四日分の食糧だとすれば、イルクーツクあたりではないだろうか」

私たちはシベリアの地図を頭に描きながら語り合った。房の上段に小さな明かりとりの窓が一つあるだけで、外の風景は見えない。三段目の棚に居場所を占めた者が、外の様子を告げる役目を負うことになった。

「北へ進んでいるぞ、原野と白カバのまじり合った広野だ。」「集落が見える。二十戸ばかりだ。駅らしいものがあつたが、素通りしてしまつた」

それからの報告を聞きながら、私たちはシベリアの風景を想像した。二時間おきくらいに、私たちは外の景色が見える三段目の場所を交代することにした。交代した

上段の者は、当然義務として外の風景を皆に知らせた。

刑務所に収容されて以来、日ごとに飢えに耐えてきた私たちは、一度に四日分の食糧をもらって食欲をそらされた。しかし、それを胃袋におさめれば、当然の報いとして後の数日を飢えに泣かなければならないのだ。

「大きな町があるぞ、五階建てのビルもある」

突然三段目の男が叫んだ。ウラジオを出て一昼夜が過ぎていた。町はハバロフスクであった。囚人車は貨物列車から切り離されて、長い時間動かなかった。

「ダワイ、パッサーチ」(小便がしたい)

排せつに困るようになった。看守は午前一回午後一回の一日二回だけしか用便に出してくれない。下痢ぎみの同僚のために看守に交渉するが、「ネリチャー」(ためだ)の一点張りである。たまりかねた同僚は、知人から借りた長靴の中に脱糞をした。狭い房内に臭気が充満したが、耐えるほかなかった。

列車はどうやら西へ向かっているようだ。ウラジオを出て三日目に入っていた。動く刑務所は、時に貨物列車から切り離され、半日近くも駅の引込線にとめていた

りした。

原野と疎林が交互に窓外に流れ、時折忘れたような集落が現われた。三日が過ぎ、四日目になったが、終着地はまだ見えない。持っていた黒パンも食い尽くしてしまった。看守はきまったように朝と午後キピャトック(熱湯)をお茶代りに運んでくるが、もう流し込むパンもない。胃袋が空になると、人々は黙り込んでしまった。

四日目、私は人々に推されて、看守にかけ合った。

「メワイ、フレーブ」(パンをくれ)

おれたちは四日分のパンをもらったただけだ。それもとくに食い尽くした。早くパンをくれ。

「ザーフトラ」(明日だ) 看守はぶっきら棒に答えた。疲れとひもじさで、外の風景の報告も途切れがちであった上段の男が、突然叫んだ。

「海が見えるぞ、広い海だぞ」

どれ本当か、ひもじさに黙り込んでいた男たちが、棚によじ上って窓をのぞいた。

「本当だ、海に違いない」

日本海だろうか、という声がある。

「バイカル湖ではないかな」

豊原警察署長だったMさんがつぶやいた。私もそうに
違いないと思った。みんなが交代で広い湖面を眺めた。

「フレブ、ダワイ」（パンをくれ）

五日目の朝になっても、パンをくれる様子はなかつた。明日と言ったじゃないか、私は看守に詰めよった。

「バタツジイ、スコロー」（待て、間もなくだ）ロシア
人のスコロー（間もなく）は、一年待つのもスコローで
あった。

五日目もパンなしで一日が暮れた。列車は湖の岸を半
日かけて走った。

動かない囚人車の中に一夜を明かして、朝方ようやく
ホームのない駅におろされた。イルクーツクであった。
空腹と疲れで動きのぶい私たちの一行を看守たちが
せき立てた。

「スカレイ、ブイストロ」（早く、急げ）

大きな橋にかかった。アンガラ大橋であった。橋を渡
るとイルクーツクの高層の建物が目前に現われた。広い
通りを、日本人の捕虜らしい人たちが掃き清めていた。

街路樹から白い花が舞っていた。

二時間近く歩かされて、着いたところはイルクーツク
の刑務所内にあるペレシルカ（囚人中継所）であった。

我等は若き義勇軍

新潟県 霜田 弘

昭和二十年八月七日、東満国境綏芬河義勇隊訓練所に
突然ソ連軍が攻めてきた。武器を持たない私たちは、ど
うすることもできず、涙をのんで降伏した。太陽が沈み
かけた七時ごろ、四列に歩かされた。八道橋というところ
に来たとき、パリパリと自動小銃を私たちに向け、
撃ってきた。次から次へと殺された。私はとっさに前の
山に逃げた。三十人殺された。私は荷物、食物何一つ持
たずに山の中を一週間さまよった。一人で寂しかった。

そのため、撃たれた仲間二人と一緒にになった。
八月二十日、沙河橋で二回目の捕虜となり、収容され
た。日本に帰すからとのことで一週間、牡丹江まで歩か